様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ５ 月 １５ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３０１０５１

研究課題名（和文）多文化にひらかれた大学教員の国境を越えたネットワーク構築に関する研究

研究課題名（英文）Constructing a Global Network of Japanese Language Instructors Teaching at Universities.

研究代表者
倉地　暁美（Kurachi, Akemi）

広島大学・教育学研究科（研究院）・教授

研究者番号：００１９７９２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　5,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、①日米韓の大学における日本語教育と教師の実態についての調査を実施した。米国では英語覇権主義が強まる中、対抗言説として日本語教育の役割が増している、韓国では日本語は言語道具主義の手段となり、危機的状況にある。日本ではグローバリスムと市場原理主義に基づく教育行政に現場が翻弄されている状況が認められた。②加えて文化本質主義に陥らず、多文化に開かれた日米独韓の大学の教員を対象にSNSによる国境を超えたネットワーク構築を試みた。自己開示や、教育実践の詳細伝達等、困難点が指摘される一方、経験の共有ができた、視野が広がったなどの意見もあり、海外に客員教授として招聘されるといった繋がりも生まれた。

研究成果の概要（英文）：In this research, we examined the current states of Japanese as a Foreign/Second Language education in USA, Korea and Japan. The result shows that a) JFL education in USA is valued as a counter discourse to English hegemony, while b) in Korea, where Japanese language is considered merely as an instrument to succeed in global economy, JFL education is facing a critical situation due to economic downfall, and c) in Japan, JSL education has been swayed greatly by the national education policy based on the globalism and the market fundamentalism. This research also encompassed a global network construction of instructors at universities from 9 countries such as Japan, USA, Germany, etc. The global network was found to be beneficial for participants to share their ideas and experiences to broaden their perspectives. At the same time, difficulties/challenges, such as building a new relationships and sharing daily educational activities through SNS, are identified.

研究分野：教育社会学

キーワード：国際比較研究　ネットワーク構築　日本語教育　大学教員　日米独韓　質的研究　文化の多様性　グローバル化

１．研究開始当初の背景

昨今教育分野を席巻した文化の多様性や多文化主義の潮流は、欧米や日本に留まらず、韓国にも大きな影響を与え、2009 年には多文化基本法が制定され、多文化家庭生徒の教育支援計画が施行されている。

筆者は 90 年代初頭から、日本の大学における多文化共生時代にふさわしい人材育成・教員養成のあり方について考え、『対話からの異文化理解』『多文化共生の教育』（倉地 1992,1998）を上梓した。とりわけ外国人学習者との異文化接触が日常的である日本語教員の中に、文化を単一的、固定的に捉える教員が少なくない点（吉野 1997）に注目し「文化の媒介者」たる教員の、文化に対する単一的な見方やバイアスが、学習者の文化・言語学習に及ぼす危険性に鑑みて、偏見やステレオタイプに対する文化的な気づきをもち、文化の多様性に柔軟に対応できる教員（以下「多文化にひらかれた教員」）はいつ、どこで、いかに養成されるのかという問題を追究することの必要性を認識するに至った。

平成 13 年より 5 年間、科研の助成を得て、国内の日本語教師を対象に質問紙・インタビュー調査を実施した結果、多文化にひらかれた教師は、教員全体の 10%程度に過ぎないこと、日本の大学までの正規の教育は、多文化にひらかれた教師の態度形成に寄与していないことが明らかになった。そこで多文化教育や民族・人種問題の経験が豊かな米国に学ぶものはないのか、米国に目を転じ、多文化にひらかれた教員の背景を探るべく 2007～2009 年、萌芽研究で日米比較研究を実施した。特に 2008～2009 年の 1 年間は、コロンビア大学客員研究員として N.Y.を拠点に米国で日本語を教える大学教員に対するライフ・ヒストリーの聞き取り、授業の参与観察、学生に対するアンケート調査等を実施し、米国の大学における「多文化にひらかれた日本語教員」の実態に迫った。

さらに 3 カ国比較の観点の重要性を認識し、2010～2012 年には多文化主義の必要性が高等教育改革の中でも重視され、シティズンシップ教育が盛んなドイツを加え、日米独の大学で日本語教育に携わる教員の中でも、文化の多様性にひらかれた教員を抽出して態度形成の背景と、彼等の教育実践がどのようなものなのか、日米独の 3 カ国比較を行うことで、先の萌芽研究で実施した 2 国間比較を発展させた。

各国の大学における日本語教育・教員がおかれている状況及び、研究対象者の態度形成の主要因として、大学院で受けたインフォーマルな多文化・批判的教育やリベラルな職場のリーダーや人的ネットワークの存在が明らかになった。

本研究で韓国に着目したのは、日韓関係を考える上で、ステレオタイプな文化観に偏らない多文化にひらかれた日本語教員の育成というテーマは重要であり、欧米諸国の学習者とは異なり、日本に対してネガティブなイメージが形成されやすい社会的環境にある韓国の大学生に対して、インフォーマントとも言うべき日本語を担当する大学教員がどのような文化観を有し、表象しているかが、学習者の異文化理解に多大な影響を与えることが推察されたからである。特に韓国においては、学習者の多くが、韓国語母語話者であり、教員も大学卒業までは、ほとんどが韓国で教育を受けており、第二外国語としての日本語を同胞に教えているという点で、欧米や日本で母語を教える教員とは背景が異なる。韓国のデータを国際比較研究の材料として加えることで、ノンネーティブの日本語教師が韓国でどのような教育や経験を経て、あるいは日本でどのような留学経験を通して、多文化にひらかれた態度を獲得したのかを明らかにす

ることができる。かかる試みは、新しい時代に相応しい国境を超えた人材（教員）養成のあり方を模索する上で、非常に重要であると考えられた。

２．研究の目的

本研究では（a）米国、韓国の大学で日本語教育に従事する教師で、自文化中心主義や、偏見、カルチャー・ステレオタイプ形成の危険性を認識し、文化の多様性にひらかれた教員を抽出し、彼等の態度がいつ、どこで、いかなるプロセスを経て形成されていったのかを解明する。

（b）韓国で収集したデータを、既に米国、日本で収集したデータと比較し、各国の大学における日本語教師の現状や位置づけ、社会的・文化的背景、教師としての成長を支えた教育・研究環境の異同や、多文化主義の教師の態度形成の影響関係を明らかにする。

（c）2013 年からの国内外における一連の調査研究の対象者のなかから抽出された「多文化にひらかれた日本語教員」を中心とした SNS を活用した日本語教員のネットワーク構築に取り組み、日本、米国、ドイツ、韓国、など９カ国のメンバー間で SNS を媒介とした教員の相互学習・相互支援のネットワーク形成のプロセスを分析し、国境を越えた教員ネットワーク形成の可能性を探究する。

３．研究の方法

研究計画は３部構成であり、(1)韓国の多文化にひらかれた大学教員に対するエスノグラフィック・インタビュー、可能な限り併せて授業の参与観察を実施すること、(2)(1)から得られた韓国でのデータ日本、米国で収集したインタビュー、アンケート調査の結果から導かれるデータを比較すること。(3)2003 年以来の多文化にひらかれた国内外の日本語教員を対象にした３つの海外調査から抽出された日本、米国、韓国、ドイツなど９カ国の国々の大学の多文化にひらかれた日本語教員による、「国境を越えた教員の相互学習・支援のためのネットワーク」を構築し、相互交流のない教員が、文化の多様性にひらかれた教育を日々実践していく上で必要な知識や経験を共有できるような場を創り出すことができるのか、ネットワーク形成にはどのような働きかけが必要か、課題の特性を配慮して、研究集会を開催し、参加者メンバーに対するフォーカス・グループ・インタビュー、ネットによる全数調査等、複数の手法を組み合わせた参加型アクション・リサーチを実施すること、より成る。

４．研究成果

①近年益々日本との関係が強化されているアメリカ、日本と近接関係を保ちながらも、近年日本語学習者の激減が顕著な韓国、そして今日日本を席巻するグローバル化の波が押し寄せている日本の大学の日本語教育プログラムや日本語教師の立ち位置に及ぼす影響について、3 カ国でのインタビュー、参与観察、ネット・サーベイによる調査を実施した。

その結果、アメリカでは日本語学習者が多様化し、教師に求められる資質や力量が変化しつつある一方で、世界共通語としての英語の覇権主義が強まる中、カウンター・ディスコースとして日本語を含む外国語教育の役割が増していることがわかった。

韓国では外国語は、言語道具主義の手段として位置づけられ、実用性がなく就職においても有利ではない日本語は危機的状況に陥っていた。その背景には、英語の覇権に加えて、政府主導の大学教育改革において相対評価が導入されるようになり、よい点数がとりにくい日本語は忌避されるという状況がある。

日本の大学の日本語教育現場では、英語

覇権主義と留学生増員計画に代表される「大学のグローバリズム」によって、語学教育とは何かという本質から甚だ乖離した市場原理主義に基づく教育行政に翻弄されている現状が浮かび上がった。

国境を超えたネットワーク構築のアクション・リサーチに関しては「面識のない者同士の自己開示の難しさ」、「(短いメッセージのやりとりや画像送信が主体の) SNS では、実践を共有することの大切はわかっていても、教育実践の詳細をネット上で共有することの難しさ」、「(国、地域による) SNS 利用の難しさ」などの困難点が指摘された。時差や学年暦の違いなどがあり、スカイプ会議などでメンバーが一同に会することは困難ではあったが、本研究では全国３ヶ所で研究集会を実施し、国内外のメンバーが参加した。いずれの集会でも、対面での話し合いには実りがあるが、それをネット上で展開することが大きな課題として指摘された。

その一方で、特に日頃海外にあり、自己の実践について相談したり、いろいろな情報を共有したりできる同僚や仲間のネットワークを持たないメンバーにおいては「経験の共有ができた」、「新たな視点を得て視野が広がった」など SNS ネットワークの構築に肯定的な意見が認められた。すなわち容易に対面でのコミュニケーションがはかれない状況にある日本語教師にとって、本研究で開設したような SNS の果たす役割が小さくないことが明らかになった。加えてこのネットワークに参加したことによって、客員教授として、他のメンバーの大学に海外招聘されるといった繋がりも生まれている。また SNS での繋がりがきっかけになって、国際学会での研究交流が始まったというケースも生じている。

本研究では、英語覇権主義が席巻し、米国を中心とする SNS が盛んな現状において、(１) 少数言語である日本語教育に携わる日本語教師の役割とは何なのか、(２) SNS を媒介とした教師間の国境を越えたネットワーク構築がどの程度可能かという２つの大きな問いに迫ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

・熊谷由理，加藤鈴子（2014）「『第三の空間』としてのテレコラボレーション」『言語文化教育研究』Vol.12,pp.148-166.
・加藤鈴子（2015）「日本語教師として生きるということ：一人の女性日本語教師の葛藤から」『九州地区国立大学間連携教育系・文系論文集』 Vol.3,No.2
・倉地暁美（2015）「グローバル時代の日本語教育事情と教師の立ち位置」『広島大学日本語教育研究』Vol.25
・中山　亜紀子（2016）「韓国人日本語教師の現状理解と日本語教育の課題」『佐賀大学全学教育機構紀要』No.4, pp.71-83

〔学会発表〕（計９件）

・加藤鈴子（2013）「自由の実践としての日本語教育：ある日本語教師のライフ・ヒストリーに学ぶ」異文化間教育学会
・熊谷由理、加藤鈴子（2014）The 21st Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings,「対話的『繋がり』のためのテレコラボレーション：『文化』を越えた意味の協働構築」
・Kumagai,Y. & Kato,R.(2014) Tension as a catalyst for intercultural learning: Critical analysis of a telecollaboration project International Society for Language Studies, 2014 Conference
・倉地暁美、中山亜紀子、加藤鈴子（2015）「グローバル時代の日本語教育事情と教師

の立ち位置：米国・韓国を中心に」異文化間教育学会
・Kumagai,Y..& Kato,R.(2015)Subjectivities in Language Choices: Towards Translingual Practice as Resources For Producing New Meanings in Cross-Language Discussions. AAAL-ACLA/CAAL 2015 Joint Conference
・Kumagai,Y.,& Kato.R.（2015）Language Learners' Subjectivities and Translanguaging: Towards Producing New Meanings in Cross-Language Discussions 母語・継承語・バイリンガル教育(MHB)研究会 2015 年度研究大会（発表抄録, pp.50-52）
・中山　亜紀子（2015）「グローバル化時代における韓国内の日本語教員：日本語教育に問いかけるもの」カナダ日本語教育振興会 2015 年次大会
・倉地暁美、中山亜紀子、加藤鈴子（2016）「言語道具主義の後に何があるのか－米国と韓国の調査を中心に」言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム、香港大学

〔図書〕（計１件）
加藤鈴子、中山亜紀子、倉地暁美（2016）「言語道具主義の後に何があるのか：韓国と米国の調査をもとに」『言語教育の「商品化」と「消費」を考えるシンポジウム報告集』Kindle

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
倉地　暁美（KURACHI, Akemi）
広島大学・大学院教育学研究科　教授
研究者番号：197922

(2)研究分担者
中山　亜紀子（NAKAYAMA, Akiko）
佐賀大学・全学教育機構　准教授
研究者番号： 20549141

加藤　鈴子（KATO, Reiko）
九州工業大学・学習教育センター　講師
研究者番号：　30633151

(3)連携研究者

(4)研究協力者
飯島　昭治（IIJIMA, Shoji）
酒井　康子（SAKAI, Yasuko）
三登百合子（Mito, Yuriko）
三輪　聖（MIWA, Sei）
宋　承姫（SONG, Soung Hee）
宋　暁非（SONG, Xiao Hi）
レイン幸代（Leing,Yukiyo）
西川由恵（Nishikawa, Yoshie）
菅井　陽子（SUGAI, Yoko）
西山　可菜子（NISHIYAMA, Kanako）
御舘　久里恵（OTACHI, Kurie）
犬飼　康弘（INUKAI, Yasuhiro）
奥野由紀子（OKUNO,Yukiko）